

# かたへの人わらふことにや有けん

——『伊勢物語』第八十七段の笑い——

佐々木 勇

## 〇、本稿の目的

本稿の対象とする『伊勢物語』第八十七段の前半を、本文として採用されることが多い学習院大学蔵天福本を原本の行取りで翻刻して、左に示す。

むかしおとこ津のくにむはらのこほり  
あしやのさとしるよし、ていきて  
すみけりむかしのうたに

〔新古今〕あしのやのな<sup>(平)</sup>た<sup>(平濁)</sup>のしほやきいとまなみ

つけのをくしもさ、すきにけり  
とよみけるそのさとをよみける  
こ、をなむあしやのなたとはいひ  
けるこのおとこなまみやつかへしければ」66才  
それをたよりにてゑうのすけとも<sup>キ</sup>  
あつまりきにけりこのおとこのこの  
かみもゑふのかみなりけりその家

のまへの海のほとりにあそひありき  
ていさこの山のかみにありといふ  
ぬのひきのたき見にのほらんといひ  
てのほりて見るにそのたき物より  
こと也なかさ二十丈ひろさ五丈許  
なるいしのおもてしらきぬに」66ウ  
いはをつ、めらんやうになむあり  
けるさるたきのかみにわらうたの  
おほきさしてさしいてたるいしあり  
そのいしのおへにはしりかゝる水は  
せうかうしくりのおほきさにてこほれ  
おつそなる人にみなたきの哥  
よますかのゑふのかみまつよむ  
〔新古今〕わか世をはけふかあすかとまつか<sup>(上)</sup>ひ<sup>(上)</sup>の  
なみたのたきといつれたかけん」67才  
あるしつきによむ  
ぬきみたる人こそあるらし白玉の

まなくもちるかそてのせはきに

とよめりければかたへの人わらふ

ことにや有けんこの哥にめて、やみにけり

この部分は、近年、教科書本文の元となることが多い『新編日本古典文学全集』（一九九四年、小学館）では、福井貞助によって、左の本文に整定され、現代語訳が当てられている。振り仮名を省略して引用する（引用文・用例所在は、新編日本古典文学全集の段数と頁数とで示す。以下同じ）。

むかし、男、津の国、菟原の郡、蘆屋の里にしろよしして、  
いきてすみけり。昔の歌に、

蘆の屋の灘のしほ焼きいとまなみつげの小櫛もささず来に  
けり

とよみけるぞ、この里をよみける。ここをなむ蘆屋の灘とはいひける。この男、なま宮づかへしければ、それをたよりにて、衛府の佐ども集り来にけり。この男のこのかみも衛府の督なりけり。その家の前の海のほとりに、遊び歩いて、「いざ、この山のかみにありといふ布引の滝見にのぼらむ」といひて、のぼりて見るに、その滝、ものよりことなり。長さ二十丈、広さ五丈ばかりなる石のおもて、白絹に岩をつつめらむやうになむありける。さる滝のかみに、わらうだの大きさに、さしいでたる石あり。その石の上に走りかかる水は、小柑子、栗の大きさにてこぼれ落つ。そこなる人にみな滝の歌よます。かの衛府の督まづよむ。

わが世をば今日か明日かと待つつかひの涙の滝といづれ高けむ

あるじ、次によむ。

ぬき乱る人こそあるらし白玉のまなくも散るか袖のせばきに  
とよめりければ、かたへの人、笑ふことにやありけむ、この歌にめてでやみにけり。

#### 【現代語訳】

昔、男が、摂津の国、菟原の郡の蘆屋の里に所領がある縁で、そこに行つて住んだ。昔の歌に、

蘆の屋の……（蘆屋の灘の塩を焼いて暇がないので、黄楊の小櫛もささずに来てしまいましたよ）

と詠じたのは、この里を詠んだのである。ここを蘆屋の灘と言った。この男は、さしたる地位でもない宮廷勤めをしていたので、それを縁にして、衛府の佐たちが集つてきた。この男の兄も衛府の督であった。その、男の家の前の海辺をあちこち遊覧してまわつて、「さあ、この山の上にあるという布引の滝を見に登りましょう」と言つて、登つて見ると、その滝はふつうの滝とは異なつている。長さ二十丈、広さ五丈ほどの石の表面、そこにまるで白絹に岩をつつんだような光景で水が流れ落ちていた。そんな滝の上の方に、円座ほどの大きさに、差し出た石がある。その石の上にいきおいよく流れそぐ水は、小柑子、栗ほどの水玉となって、飛び散り落下する。そこにいる人に残らず、滝の歌を詠ませる。あの衛府の督が、まず詠む。

わが世をば……（私の得意の時が、今日来るか明日来るかと待つそのか、いもなく流れ落ちる涙の滝と、この滝と、どちらが高いことであろう）

主人の男が、次に詠む。

ぬき乱る……滝の上の方で、緒を引きぬくことをして、つらねてある白玉を乱し流している人がいるらしい。なんと白玉が絶え間なく散ることか、それを受ける私の袖は狭いのに)

と詠んだので、側にいた人は、おかしみを覚えたのであろうか、この歌に興じいつて歌を詠むのをやめてしまった。

(八七段・190～192頁)

右引用のとおり、「ぬき乱る」の歌を聞いた人々が「おかしみを覚えたのであろうか、この歌に興じいつて歌を詠むのをやめてしまった。」とする。

しかし、「笑ふこと」は、「おかしみを覚え」ることであらうか。

また、「ぬき乱る」の歌は、「おかしみを覚え」る歌であらうか。

そして、「おかしみを覚え」ることと「興じい」ることが同時に起きるであらうか。

本稿は、右の『伊勢物語』第八七段本文について、ことばに基づく、自然な解釈を示すことを目的とする。

## 一、『伊勢物語』成立時における「わらふ」

まず、『伊勢物語』成立時の動詞「わらふ」の意味を確認する。

『伊勢物語』には、もう一例、「わらふ」の用例が有る。

例の、このみ曹司には、人の見るをもしらでのほりみければ、この女、思ひわびて里へゆく。されば、なにの、よきこと、と

思ひて、いきかよひければ、みな人聞きて笑ひける。

(女の里へしばしば行き来したので、人々はみなこれを聞いて笑ったのであった。)

(六五段・167頁)

右の( )内は、新編日本古典文学全集の現代語訳抜粋である(以下、新編日本古典文学全集を引用する場合は、同じ)。

右例は、男の常識外れの行動を笑っている。これは、現代語「笑う」の用法に等しい。

左に、同時代における「わらふ」の用例を加える。

寛平御時に、うへの侍ひに侍りけるのをこのども、瓶を持たせて、后の宮の御方に「大御酒のおろし」と聞えに奉りたりけるを、藏人ども笑ひて、瓶をお前にもていでて、ともかくも言はずなりにければ、使ひの帰り来て「さなむありつる」と言ひければ、藏人のなかにおくりける

(女藏人たちが笑いながら瓶を御前に持ち出したが)

(古今和歌集・雑歌上・874番歌詞書き・332頁)

女どもの見て笑ひければよめる 兼芸法師  
かたちこそ深山がぐれの朽木なれ心は花になさばなりなむ

(女たちが作者を見て笑ったので詠んだ)

(古今和歌集・雑歌上・875番歌詞書き・333頁)

そのうたふ歌は、

春の野にてぞ音をば泣く 若薄に 手切る切る摘んだる菜  
を 親やまぼるらむ 姑や食ふらむ かへらや夜べのうな  
ぬもがな 銭乞はむ そらごとをして おぎのりわざをし  
て 銭も持て来ず おのれだに来ず

これならず多かれども、書かず。これらを人の笑ふを聞き、海は荒るれども、心はすこし風ぎぬ。

(これらを人が笑うのを聞いて、)

(土左日記・九日・25頁)

まだ幼き童の言なれば、人々笑ふときに、ありける女童なむ、この歌をよめる。

まことにて名に聞くところ羽根ならば飛ぶがごとくにみやこへもがな

とぞいへる。男も女も、いかでとく京へもがな、と思ふ心あれば、この歌よしとはあらねど、げに、と思ひて、人々忘れず。

(人々が笑ったおりに)

(土左日記・十一日・27頁)

その歌、よめる文字、三十文字あまり七文字。人みな、えあらで、笑ふやうなり。歌主、いと気色悪しくて、怨ず。まねべどもえまねばず。書けりとも、え読み据ゑがたかるべし。今日だにひがたし。まして後にはいかならむ。

(人々はみな、こらえきれず、笑っているようだ。)

(土左日記・十八日・33頁)

『古今和歌集』『土左日記』における「笑ふ」も、『伊勢物語』同様、予想外の行動や常識外れの歌について抱いた感情が、思わず、笑い声や表情となって表われる動作である。興味深く思う、という感慨・思考ではない。

『日本国語大辞典 第二版 13』(二〇〇二年、小学館)では、「わら・う」「わらふ」【笑・咲・嗤】の最初に、次のように記す。

(1)喜びやおかしさなどの心情を、声または顔の表情で表出する。おかしがって顔をくずし声をたてる。哄笑(こうしよ)する。えむ。

\*新訳華嚴経音義私記(794)「微笑 下音燒 訓和良布」

\*竹取物語(9C末~10C初)「これを聞て、はなれ給ひしものの上ははらをきりてわらひ給ふ」

\*大鏡(12C前)一・序「あふぎをさしかくして、気色だちわらふほども、さすがにをかし」

\*観智院本類聚名義抄(1241)「咲 ワラフ エム エエワラフ」

\*源平盛衰記(14C前)二六・御所侍酒盛事「三十人が音して拍子をとり喚叫。はと笑(ワラヒ)、どと笑など」

\*日葡辞書(1603~04)「ドット yaro(ワラウ)〈訳〉大勢の人が、いつせいに大声で笑う」

\*小学読本(1884)〈若林虎三郎〉五「春の暮、夏の初、風穩に波靜にして水天一碧睡るが如く笑ふが如き日」

(2)以下、省略。

『角川古語大辞典 第五卷』(一九九九年、角川書店)では、左のとおりである。

①ここにこする意の「えむ」よりも感情の表し方が強く、口をあけ声を立てて喜びやおかしさを表出する。一般に、状況や性情が普通とは異なっている事柄が対象となり、『尤の草紙・下』には「わらふ物のしなじな、一、左繩、み、づくに小鳥、物狂に子共のあつまり、狂言、上手のはなし、なまじみの事

をとりか、りてえしとゞげざる事、天狗がくさびらにゑひたる」などある。

①声を立てておもしろがる。哄笑する。

例「皇軍 いくさのきみ」大に悦て天に仰て咲「ワラへー

ば」〔神武即位前紀戊午年・伊勢本訓〕

例「尼共も木伐人共も、互に舞つ、なむ咲（わらひ）ける」

〔今昔物語集・二八・二八〕

例「わろうてつらき日もあれば泣（ない）て嬉しき夜半も

有」〔穴可至子〕

②あざける。嘲笑する。

例「後生の賢者、幸しくも噎唾（和良不己止）勿れ」〔日

本靈異記・上・序〕

例「なよびかに、をかしきことはなくて、交野の少将には、

わらはれ給ひけんかし」〔源氏物語・帚木〕

②以下、省略。）

右のように、古代語における「笑ふ」も、現代語同様、「喜びやおかしさなどの心情を、声または顔の表情で表出する」動作である。

感嘆し・称讚する場合に起きる動作ではない。

## 二、「ぬきみたる」の歌

「ゑふのかみ」の「わか世をはけふかあすかとまつかひの／なみたのたきといつれたかけん」の次に、「あるし」が「ぬきみたる人こそあるらし白玉の／まなくもちるかそてのせはきに」と詠んだ。

この「ぬき乱る」歌は、壮大な滝のさらにその上から、白玉を連ねる緒を引きぬく神のごとき人を想定し、そのぬき乱れた大粒の白玉が下界の人々の狭い袖に散ってくる、と詠む。流れ落ちる大量の水としぶきとそこに居合わせた人々との、時間と空間を詠じている。「ぬき乱る」歌は、『古今和歌集』巻第十七・雑歌上、『新撰和歌集』、『古今和歌六帖』などにも収載された業平の名歌である。笑いを誘うような歌では無い。

この「ぬき乱る」歌が笑いを誘われる歌でないことは、古来、認められている。

左に、「わらふことにはやありけん」の本文について、「かたへの人」が「わらふ」理由を解釈した注が見られる古注を引用する。<sup>(2)</sup>

a『和詔知頭集』(伊勢物語知頭集)

わらうとにやありけりけん「マ」とはきやまんしてやほめつら

んといふ事なるへし (時雨亭文庫蔵本・巻二48才7)

b天理図書館蔵『和語知頭集』

かたへの人わらふ事にや ほめつらんといふ事なるへし

(26才1)

c一条兼良『伊勢物語愚見抄』

かたへの人わらふことにやありけん

わらふは哥のわろくておかしく思ふにはあらず入興したる

心也 (時雨亭文庫蔵兼良自筆本・下27才)

d宗祇『伊勢物語首聞抄』

かたへの人わらふ事にや 入興の義也

(国文研蔵本(98・77) 64才)

e『伊勢物語奥秘書』

わらふ事有けんとは衛府介共の褒美する事也

(国文研蔵本〈98-730〉第四冊27才)

f『伊勢物語問書』

かたへの人わらふことにや

入興の義也

(大東急記念文庫蔵本巻下(103)・13才)

g『伊抄』

かたへの人わらふことにや 卑下の辞也。一は入興也。

(『伊勢物語古注釈大成 巻第四』〈二〇〇九年、笠間書院〉一

五八頁)

右のごとく、源経信(二〇一六—一〇九七)作とされる『和調知  
顕集』以来、「ぬき乱る」歌は、高く評価されている。<sup>(4)</sup>

c『伊勢物語愚見抄』も、「哥のわろくておかしく思ふにはあらず」、  
とし、「入興したる心也」と述べる。

そして、「ほめ」、「入興したる心」で笑わないことは、すでに確認  
した。

そのため、「かたへの人わらふことにや」を「卑下の辞也」とする

g『伊抄』の解釈も出る。歌を卑下して、笑われるような歌であった、  
と書いたとする意であろう。

しかし、それでは、「わらふことにや有けんこの哥にめて、やみに  
けり」と続くことが理解できない。笑っていた歌に愛でて、その笑  
いが止んだ、とはいかなることであろうか。

これも、高く評価すべき「ぬき乱る」歌に続く「とよめりければ  
わらふことにや有けん」を説明するために考案された説であろう。

承服できない。

### 三、「かたへの人」が笑っていた歌

以上の検討から、「かたへの人」が「ぬき乱る」の歌を笑った、と  
考えることには無理があることが知られた。

では、「かたへの人」は、何を笑ったのであろうか。

これも、『伊勢物語』中のことばから考察する。

「わらふことにや有けん」と同じ「にやありけむ」の例が、『伊勢  
物語』に他に三例存する。左に引用する。

○この女、いと久しくありて、念じわびてにやありけむ、いひおこ  
せたる。(こらえきれなくなつてあろうか)(二一段・132頁)

○すこし頼みぬべきさまにやありけむ、ふして思ひ、おきて思ひ、  
思ひわびてよめる。(少々頼みにできそうすだつたのだから)

か(九三段・195頁)

○むかしもかかることは、世のことわりにやありけむ。(世間一般の  
道理であつたのだからか)(九三段・195頁)

いずれの「にやありけむ」も、「にや」と「けむ」とで、「あり」  
が過去に存したことを疑いながら推量している。<sup>(5)</sup>

したがって、本段の「笑ふことにやありけむ」も、「笑っていたの  
であらうか」であり、「かたへの人、笑ふことにやありけむ」は、

「かたへ的人是に笑っていたのであろうか」の意である。

その笑いが、「ぬき乱る」の「歌にめでて」、止んだ。

よって、「ぬき乱る」歌の前に、「かたへの人」は笑っていた。本

文からは、その笑いの対象は、直前の「わが世をば」の歌であったとしか考えられない。

わか世をばけふかあすかとまつかひの／なみたのたきといつれ  
たかけん

『新古今和歌集』巻第十七「雑中」に採られるこの歌は、不遇を嘆く涙の滝と、目前の滝との高さを比べている。人一人がどれほど泣いても、その涙の高さが二十丈の滝に及ぶはずがない。

「かたへの人、笑ふことにやありけむ」は、この「わが世をば」の歌を聞いて、「かたへの人」は笑っていたのであろうと推量した一文である。

#### 四、結論 — 問題部分の解釈 —

以上で、最初に記した、現行注釈書の解釈に対する疑問

○「笑ふこと」は、「おかしみを覚え」ることであろうか。

○「ぬき乱る」の歌は、「おかしみを覚え」る歌であろうか。

○「おかしみを覚え」ることと「興じい」ることとが同時に起きるであろうか。

は、すべて解消された。

意想外の対比を詠んだ「わが世をば」の歌を、「かたへの人」は笑っていた。

そして、次の「ぬき乱る」歌のみごとくなでさばえに、その笑いは止み、この名歌に続けて歌を詠むことができなくなった。

『伊勢物語』のこことばに即せば、右の解釈となる。

ところが、古注の影響であろうか、先引の「新編日本古典文学全集」に見られたように、現行の注釈書は、人々が笑っていたのは「ぬき乱る」の歌である、とする無理な解釈が大多数である。<sup>(6)</sup>

その中で、「新潮日本古典集成」（一九七六年、新潮社）に、渡辺実による、左の頭注が見られる。

歌の後の「笑ふことにやありけむ」と「この歌にめでてやみにけり」とが、調和しないので諸説がある。だが「笑ふ」は行平の歌に関わることであろう。行平は、一種の歌会となったこの場面で「まづ」歌をよんでいる点から見て、いわばこの集まりの正客という格好であったらしい。しかるに行平は、主が弟業平であり、集まっているのも部下クラスだという気安さからか、身の不遇を露骨に嘆く歌をよんでしまった。それを場違いなと内心で笑っていたらしい人が、つづく業平の、同じく身の不遇をよみながらもすぐれた歌に動かされた、というのであろう。いわば業平はこの場面で、主として正客を、弟としては兄を、救ったことになる。

「笑ふ」は行平の歌に関わることであろう」と断定を避けているものの、「かたへの人」は「わが世をば」の歌を笑っていた、という見解が示されている。

#### 五、むすび — ことばに即して古典文学を読む —

学術誌「文学・語学」219号（二〇一七年六月）は、「国語学小特集 日本語研究と日本文学研究との接点」であった。その巻頭言

を、左に部分引用する。

日本文学研究と日本語研究とは隣接分野でありながら、現状において、その最新の研究成果が互いに参照される機会はそれほど多くなく、その意味で昔よりも接点を失っているように見受けられます。

(中略)

語学研究と文学研究とは、最終的に何を明らかにしようとするのかという目的を異にしていますが、テキストの正確な読解・解釈という点においては、その目的を共有しているといつてよいでしょう。この点において、語学研究と文学研究は、今でもなお、一つの接点を有していると考えます。

「文学・語学」という名の学術誌が「今でもなお、一つの接点を有している」と書かねばならないほど、文学と語学の専門化・細分化が進んで来た。

とはいえ、つぎの動きもある。右特集号の巻頭論文から引用する。言うまでもないが、日本語史研究は古典文学のテキストを資料として行われることが多い。そして、そのことが可能であるためには、資料としたテキストに何が書いてあるか、理解できることが必須である。ところが、日本語史研究者は、その内容の読解については、ほとんど古典文学研究者の業績に依存しているのが実情である。それらの読解が正確であれば問題はない。しかし、人間の業（わざ）として、もとより完璧なはずはない。したがって、日本語史研究者は、自らの問題としてそれらの読解に取り組む必要がある。そして、日本語史研究の成果あるい

は日本語学的な関心に基づいて、問題を解決すれば、自己の研究に役立つというだけでなく、古典文学研究に一定の貢献を果たすことになるであろう。

(山口佳紀『大和物語』諸段の解釈をめぐる——日本語学からの貢献——)

山口佳紀『伊勢物語を読み解く表現分析に基づく新解釈の試み』(二〇一八年、三省堂)は、文学・語学研究者の必読文献である。

また、小松英雄『伊勢物語の表現を掘り起こす《あづまくだり》の起承転結』(二〇一〇年、笠間書院)のイントロダクションは、

本書で試みるのは、平安時代の仮名文学作品の表現を、テキストの一字一句にこだわりながら、隅から隅まで、書き手が意図したとおりに理解しようとする地味な基礎作業です。その作業をつうじて、これまで、平安末期以来の歌学者から現今の国文学者に至るまで、読み誤ったり見過ごしたりしてきた、繊細で豊かな仮名文テキストの表現を発見することが、仮名文の表現を掘り起こす、ということです。

の段落から始まる。

各章あるいは本書全体の結論には、異論も存するであろう。

しかし、小松が導いた「テキストの一字一句」の解釈を否定するには、集められた根拠か、それらの根拠に基づく推論を否定しなければならぬ。

文学はことばの芸術であるから、テキストのことばの研究は、文学研究の基礎である。そのため、『伊勢物語』のことばに関しても、多くの研究蓄積がある。

たとえば、「筒井筒」として教科書に多く採用される第二十三段冒頭の「ゐなかわたらひしける人」について、仁平道明「ゐなかわたらひ」考（『解釈』一九八二年十一月号）が有る。「ゐなかわたらひしける人」とは、「秩満解任之人、王臣子孫之徒」<sup>(7)</sup>のような、京から「ゐなか」の莊園等に集団で下つてきて住み着いた人たちであり、第二十三段の男と女とは、その「子ども」であった、とする。「ゐなか」とは京以外の畿内諸国であつて、「大和は、伊勢物語にあつては、まさに「ゐなか」だったのである。」（仁平道明（一九八二）44頁）。仁平は、「彼等が京から移り住んだ「ゐなか」には、その集団が暮らすために必要な共同の井戸が掘られていたはずである。そして「ゐなかわたらひしける人の子ども」は、その井戸のそばでいっしょに遊んだのだろう。」とも後に述べた（仁平道明「井のもとに出でてあそびけるを」〔『解釈』二〇三年、三・四月号〕）。

一九八二年に公表された仁平の説は、教科書の注によく採用されてきた。

古代のことは、未解明の部分が大きい。

文学研究・語学研究とも、ことばの研究と、それに基づいた文章読解の必要性は、将来も失われることが無い。

注

(1) 多くの注釈書が採用する定家本系天福本の段落分けによる通番で示す。

(2) 他の古注・旧注に見られる、記者が自らを嘲った「自記」であるという注や、本文を「わらへごと」にや有けん」に改変した

注は、「かたへの人」が「わらふ」理由ではないため、引用を省略した。

(3) 武井和人氏蔵兼良自筆本は、「かたへの人わらふこと」や「わらふはうたのあしくてをかしき」にはあらず入興する心也」(73才)とある。

(4) a 『和詞知頭集』の「きやまん」に比定される語が不明である。今は、「ほめつらん」の結句を評価語として判断した。

(5) 『例解古語辞典 第三版』(一九九二年、三省堂)では、「にや」に「あらむ」「あるらむ」「ありけむ」に続けて用い、係り結びとなつて、全体で、疑いの気持ちを加えて事態を推量する意を表わす。…(の)で…か、「けむ」に「過去に実現した物ごとについて、推量する意を表わす。」の注が有る。

(6) 『伊勢物語』の現行注釈書は多いため、広く参照されているものと比較的新しいものから、「わらふこと」にや有けん」の解釈を示したものに限つて引用する。

○大津有一・築島裕「日本古典文学大系」(一九五七年、岩波書店)頭注

興味を持ちおかしく思ったのだろうかの意か。愚かな着想を笑うのであろうか、の意ともいう。

○秋山虔「新日本古典文学大系」(一九九七年、岩波書店)脚注

この「笑ふ」は、衛府督の歌の重苦しさを巧みに逸らした奇抜な歌の趣向に、人々はほっとして顔をほころばせ声をあげたのであろう。

○永井和子「笠間文庫」(二〇〇八年、笠間書院)「笑ふ。」への脚注

よくわからない。「笑ふことにやありけむ」と続けて、「前の歌について笑っていた人たちが」、「笑う表現だったろうか、そうではなく」「苦笑することがあったかもしれないが」などと解されている。仮に切って解した。

○片桐洋一「伊勢物語全読解」(二〇一三年、和泉書院) 語釈

「笑ふことにや有りけん」は「笑うほどにおかしな歌だったのだからか」と訳されているが、それでは、次の「この歌にめでて：」に続かない。強い疑問、もしくは反語と見て、「笑うほどにおかしな歌だったのだからか、いやそうではなく、他の人にはこれ以上の歌が詠めないのです、この歌に感心して、この場での小歌会はお開きになった」と解すべきであろう。

(7)

『類聚三代格』寛平三年(八九二)九月十一日・太政官符「応禁制京戸子弟居住外国事」の一文である。この太政官符は、「右斉衡二年(八五五)六月廿五日格符、延暦十六年(七九七)四月廿九日下太宰府符、從二位行大納言神王宣、奉勅、括責浮宥、先己下知」と始まる。「応禁制京戸子弟居住外国事」と同様の下知は、しばしば出されていた。ここから、『伊勢物語』の時代に、「京戸子弟居住外国」の常態化が有ったことも、仁平は指摘している。

(8)

「伊勢物語」では、「あづま」や「みちのくに」や「つくし」を舞台とする章段に「みなか」の語が用いられることはない。それらの土地は、伊勢物語作者にとっては、「みなか」ですらない

辺境だったのであろう。」(仁平道明(一九八二)44頁)、とされる。

(広島大学)